

宮沢賢治『銀河鉄道の夜』

1924年ごろ初稿が執筆され、晩年の1931年頃まで推敲がくりかえされて、1933年の賢治の死後、草稿の形で遺された。初出は1934年刊行の文圃堂版全集である。

宮沢賢治（宮澤賢治）（みやざわ けんじ、1896年8月27日（戸籍上は1896年8月1日） - 1933年9月21日）は、日本の詩人・童話作家・農業指導家・教育者。郷土岩手の地を深く愛し、作品中に登場する架空の地名、理想郷を「岩手（いはて）」をエスペラント風にしたイーハトヴ（Ihatov）（イーハトーブあるいはイーハトーヴォ（Ihatovo）等とも）と名づけた。その空前・独特の魅力にあふれた作品群によって没後世評が急速に高まり国民的作家とされるようになった。

石川 啄木（いしかわたくぼく、1886年（明治19年）2月20日 - 1912年（明治45年）4月13日）は明治時代の歌人・詩人・評論家。本名は、石川 一（はじめ）。『一握の砂』1910年（明治43年）

何となく汽車に乗りたく思ひしのみ
汽車を下りしに
ゆくところなし

人ありて電車のなかに唾を吐く
それにも
心いたまむとしき

かの旅の汽車の車掌が
ゆくりなくも
我が中学の友なりしかな

ふるさとの訛なつかし
停車場の人ごみの中に
そを聴きにゆく

霧ふかき好摩の原の
停車場の
朝の虫こそすずろなりけれ

汽車の窓

はるかに北にふるさとの山見え来れば
襟を正すも

ふるさとの停車場路の
川ばたの
胡桃の下に小石拾へり

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

三度ほど
汽車の窓よりながめたる町の名なども
したしかりけり

演習のひまにわざわざ
汽車に乗りて
訪ひ来し友とのめる酒かな

あくび噛み
夜汽車の窓に別れたる
別れが今は物足らぬかな

(あくびは本来漢字)

雨に濡れし夜汽車の窓に
映りたる
山間の町のともしびの色

雨つよく降る夜の汽車の
たえまなく雫流るる
窓硝子かな

石狩の美国といへる停車場の
柵に乾してありし
赤き布片(きれ)かな

子を負ひて
雪の吹き入る停車場に
われ見送りし妻の眉かな

ゆるぎ出る汽車の窓より
人先に顔を引きしも
負けざらむため

みぞれ降る
石狩の野の汽車に読みし
ツルゲエネフの物語かな

忘れ来し煙草を思ふ
ゆけどゆけど
山なほ遠き雪の野の汽車

うす紅く雪に流れて
入日影
曠野の汽車の窓を照らせり

腹すこし痛み出でしを
しのびつつ
長路の汽車にのむ煙草かな
水蒸気
列車の窓に花のごと凍（い）てしを染（そ）むる
あかつきの色

いたく汽車に疲れて猶（なお）も
きれぎれに思ふは
我のいとしさなりき

うたふごと駅の名呼びし
柔和（にうわ）なる
若き駅夫（えきふ）の眼をも忘れず

遠くより

笛ながながとひびかせて
汽車今とある森林に入る

何事も思ふことなく
日一日（ひいちにち）
汽車のひびきに心まかせぬ

さいはての駅に下（お）り立ち
雪あかり
さびしき町にあゆみ入（い）りにき

汽車の旅
とある野中（のなか）の駐車場の
夏草の香（か）のなつかしかりき

朝まだき
やっと間（ま）に合（あ）ひし初秋（はつあき）の旅出（たびで）の汽車の
堅（かた）き麵（ぱん）かな

かの旅の夜汽車の窓に
おもひたる
我がゆくすゑのかなしかりしかな

ふと見れば
とある林の駐車場の時計とまれり
雨の夜（よ）の汽車

わかれ来（き）て
燈火小暗（あかりをぐら）き夜の汽車の窓に弄（もてあそ）ぶ
青き林檎（りんご）よ

夜おそく停車場に入り
立ち坐り
やがて出（い）でゆきぬ帽（ぼう）なき男